

本庄南用水路は、森永を起点として竹田、北本庄、犬熊、宮王丸、大田原までの全長10,190m、276haの水田に水をくばっています。

## 登場人物



与三郎



龜太郎



庄三郎



八百治



精次郎



栄之助



為助



徳次

この用水路は、明治13年、井上亀太郎ほか7名の人たちが、8年という長い歳月の中で多くの困難とたたかいながら完成させたものです。



「与三郎どん、おまえ、まだ水をくんじよるか・・・。」  
やみの中から重苦しい声がありました。「ああ・・・。」と、これも力のない返事です。すると、金つるべの水の音がかすかに聞こえてきました。「だめじゃー、八百治どん。もう井戸の水もかかれたわ。上がってくるもんは泥ぼっかりじゃー。」





安政6年(1859年)といえますから、今からおよそ150年以上も前のことです。



この年は、6月から8月にかけて日でりが続き、本庄付近の水田は、ほとんどが  
かれあがって、農家の人達の苦しみは大変なものでした。



「五雲先生の話じゃ、豊後の下あたりじゃ、用水が豊かで、農家の人達やとっても楽だそうな。」

村の五作がそれを聞いて、わしも豊後へ行きたいと言うたら、先生は、「とんだ考え違いだ。故郷を捨てる前に、なぜもっと故郷を良くすることを考えないんだ。自然の恵みが少なかったら人の力でやったらどうだ。」と、おっしゃったそうだ。





「なに、人の力でとな。」与三郎は腕を組んで考えました。

「そうだ、人の心と力が一緒になれば、どんな事でもできる。なあ与三郎どん、わしはあの川の水をなんとかして田に引く方法がありそうに思えるのだが、どうじやろう。」

「なるほどそれは良い考えじや、まんざらできない事もなさそうじや。」



こうした話がきっかけになり、二人は、六日町の井上亀太郎と相談し、本庄川の北岸一帯の土地の高さや、水の流れ具合などを調べ、水路を通すことに意見がまとまりました。早速この計画に賛成してもらうため、多くの人達に呼びかけることになりました。





そして、儒学者で、「五雲先生」と呼ばれていた高妻秀遠(ひでとう)先生を訪ね、この計画を話しました。すると、秀遠先生は大変感動され、早速、県の係官である藁谷(わらがや)秀孝に会い、水路開通の必要性を熱心に説明したのです。

樹木計檢査校取手學年毎表就て請願通一日  
 御色許被仰付て之終全代保着手前魚  
 上知可仕る所共故本願上俵也  
 日向田諸縣郡不正御本共村  
 水路卷起八  
 明治十四年五月 井上龜太郎  
 宮崎 長吉  
 清

鹿兒島縣人渡辺千秋敬

懇願書

作恐又々強々懇願余該本在村新規海  
 爲可所以八人行御合い如可肯  
 昨三月九月中始出願仕候、此願上俵  
 御本政夜爲格借金餘義難及但御  
 以行八人更可被出旨其御知仕  
 御國益大工費金今年存平七下借相  
 御儘有之趣、依傳得共今御定止相成  
 該願人共疎漏カ校點、起り無事等  
 右年借金員金、國益成す不朽彫

その努力が実り、県から工事費が2万8千円、今のお金でいうと4億2千万円で工事の許可がおりました。いよいよ工事着工の準備も終わったその時、宮崎県が廃藩置県のため、鹿兒島県に合併されることになったのです。しかも、その後のおこった西南の役という戦いがおこったため、工事は中止となってしまいました。しかし亀太郎たちの意思はなお硬く、時のくるのをじっと待ちつづけていました。しかし、なかなか着工できませんでした。



明治13年1月20日、20数名の仲間たちが、井上亀太郎の家に集まり水路開通について話し合いました。だが、意見ばかりが多くて、結論が出ません。その後も話し合いを重ねましたが、仲間の数は減っていくばかりでした。

亀太郎はついに決心し、最後のあつまりを開いたのですが、またしても結論が出ません。





「わたしたちの力だけじゃ、どうにもならんわい。へたなことをして物わらいになるのがおちだ。」「おーそうじゃ、そーじゃ。県でさえ中止した大事業を、なーんでわたしたちだけでできるもんか！ こだらごとに、手まどっていは水飲み百姓が水も飲めんなるぞ。」「おー、帰ろ、帰ろう。」

口ぐちにそう言うと、ほとんどの人が立ち去ってしまいました。その後ろ姿を亀太郎達は声もなく見送るのでした。



昨日までの仲間が、今ではあざけりとののしりとで離れていきました・・・。

「あー、残ったもんはこれだけか。ま、みんな集まってくれ。」 亀太郎の声で集まったのは、たった7名です。

岩切為助、宮永八百治、吉野庄三郎、巢山徳次、長友精次郎、巢山与三郎、そして岩切栄之助。

「亀太郎どん、やろう。」しばらくして7名が口をそろえて言うと、「おーお、やるとも。命がけでの。」ここに8名は兄弟のちかいを結びました。そして自分達の財産を投げ打って、この大工事に取り組むことになりました。



まず測量の開始です。

次の年の明治14年4月、自費開発の許可を県からもらい、24日には工事にとりかかりました。この大工事を完成させるために、自分達の山や田畑を売り、家も宅地も売りはらい、自分の持ち物や妻、子ども達の着るものまで、みんなお金にかえたのです。ほんとに血と涙の結晶のお金でした。





しかし、多くの工事費にどれだけのたしになるのでしょうか。またたく間にこのお金がなくなってしまいました。しかし、工事をやめるわけにはいきません。亀太郎達は、工事費を国から借りる政府へ請願をはじめたり、工事用の木材などの払い下げを願い出たりしました。また、近くの村々へお金を貸してもらおうための相談に出かけたりするなど、食べることも寝ることも忘れて走り回る毎日が続きました。この苦しみやつらさは言葉では言い表すことができないほどでした。

不在村水路開墾費之儀 付款額  
 當平洋村水路開墾工之儀 付子之儀 迄是迄是  
 奉蒙御賜思加之大政府迄之御上申被  
 下度度先般特別之御仁恤ヲ以金志萬同  
 十六年度リ、強見島縣廳御貸下相成  
 山達之趣 拜末遂有奉 佩貸下相成  
 十六年度則本年七月リ 悉皆私共御貸  
 被成下度儀、奉存度度 豈斗哉量、  
 見島縣廳、十七年一月迄、期限ヲ以全九千  
 拜借仕居度度 故金、石政府、リ特別以  
 補助御貸下全志、島内ヲ以御返納可致

北池島部長谷村純孝殿

可成我、誰事の、同此殿不承  
 庄名申上直差也  
 廿九日 北池島部長谷村  
 申上直差也  
 廿九日 北池島部長谷村  
 申上直差也

努力の毎日が続きました。でも、工事は半分も終わっていません。亀太郎達が出し合ったお金と寄付金を合わせてつくった3千3百円。すでに使い果たしてしまった上に、借金も1万8千円。今のお金では、2億7千万円にもふくれ上がっていました。



この工事を始めから援助していた三輪太一郎、高妻秀遠、岩切直七は、何度もり県と話し合い、ようやく県から9千円を借り出すことに成功しました。しかし、やがてこのお金も使いはたしてしまいました。





工事は、まだ八分どおりしか進んでいません。



そして、このころになると人から惜りたお金のさいそくは激しくなり、亀太郎達はもう心身ともに疲れはてていました。

ある日六日町の岩切為助の家に集まってどうしたらよいかを話しあうことにしました。「わしはもう精も魂もつきはてた、今日までしんぼうしたのは村人のためと思えばこそだ。ところが、あれが馬鹿だなんだとののしられ、したんつるで村んもんから土まで投げつけられた。と、精次郎がくやしげに言いました。となり村の源助から金を借りたばかりに、「8人みんなが丸坊主になってあやまれば、3日ばかりはさいそくを待ってやろう」と、そう言われた。徳次も、そう言ってうつむきました。亀太郎達はもう良い知恵もうかばず、どうすることもできず困りはてていました。



その時、為助が「わしは死ぬ、それより他に道はあるまい。」と言い出しました。「だが政府や県や善意の人達から借りたお金をそのままにしておけまい。わしも、もうどうしていいかわからん。」思慮深い亀太郎も言いました。「死んでおわびをしよう。わしは死ぬことに賛成だ。」八百治が言えば与三郎も栄之助も精次郎も声をそろえて同意しました。そして、お互いに水さかづきをくみかわし、「かくごはいいか。みにくい死にざまはみせまいぞ。」と、刀をぬき、あわやと言う時でした。





「まてー。」と言う声。「おっ先生だ。五雲先生だ。」「おっ、先生だ、五雲先生だ。」8人は、面目なさそうにうつむいてしまいました。秀遠はその考え違いをじゆんじゆんとさとし、「今一度、死んだ気になって努力せよ。」と、はげめました。こうして亀太郎たちはふたたび目的に向かってふるい立ったのであります。



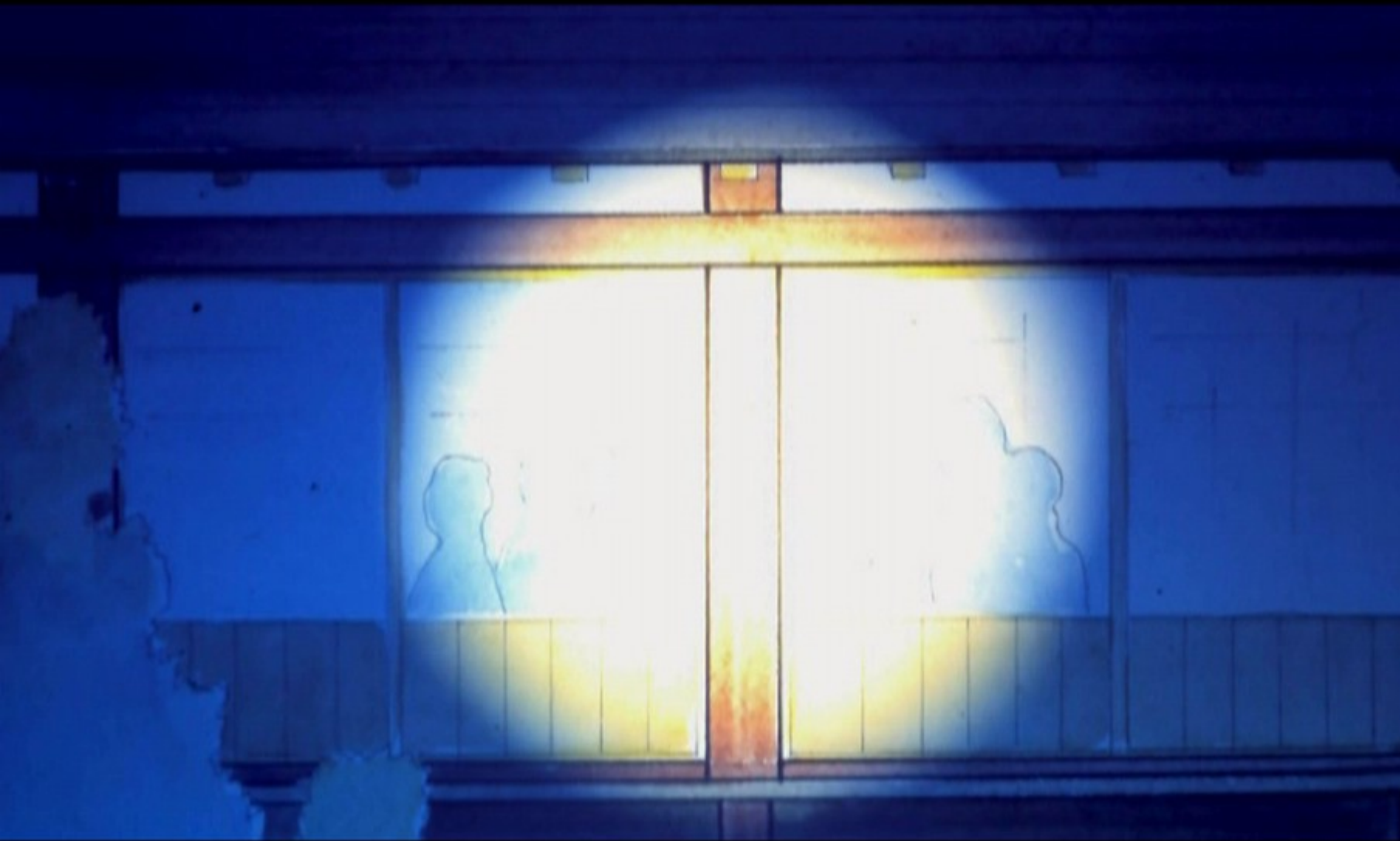
秀遠は直七とはかり、都城に行き、郡長の長谷場純孝に政府の金1万円の借用を願い出ました。しかし、先に県から借りた9千円を返さなければ貸せないと言われてしまいました。もうこの上は政府にたよるほかないと亀太郎たちは、ついに決心して東京へ旅たったのです。

明治16年10月9日、追いつがる両親、泣き叫ぶいじらしい妻や子の姿を後にして8名は、野をすぎ山を越え山陽道、東海道をただひたすらに歩きつづけました。



長い月日が過ぎてようやく東京につくと、まずこびき町の旅館 桜井やさんえもん方にとまり、参議院議官 渡辺昇、その他に願書の取り次ぎ方をたのみました。が・・・、いずれも正式の手続きをしなければ受け付けられないとはねつけられてしまいました。





そのとき亀太郎たちは、お金もみんな合わせて28銭しか持っていませんでした。



ちょうどその時、県係官 藁谷秀孝が公用で東京に来ており、亀太郎達の事を知るとさっそく8名を連れ、同じく上京していた田辺県知事を訪ねました。しかし、いくら願い出てもいっこうに道は開けません。

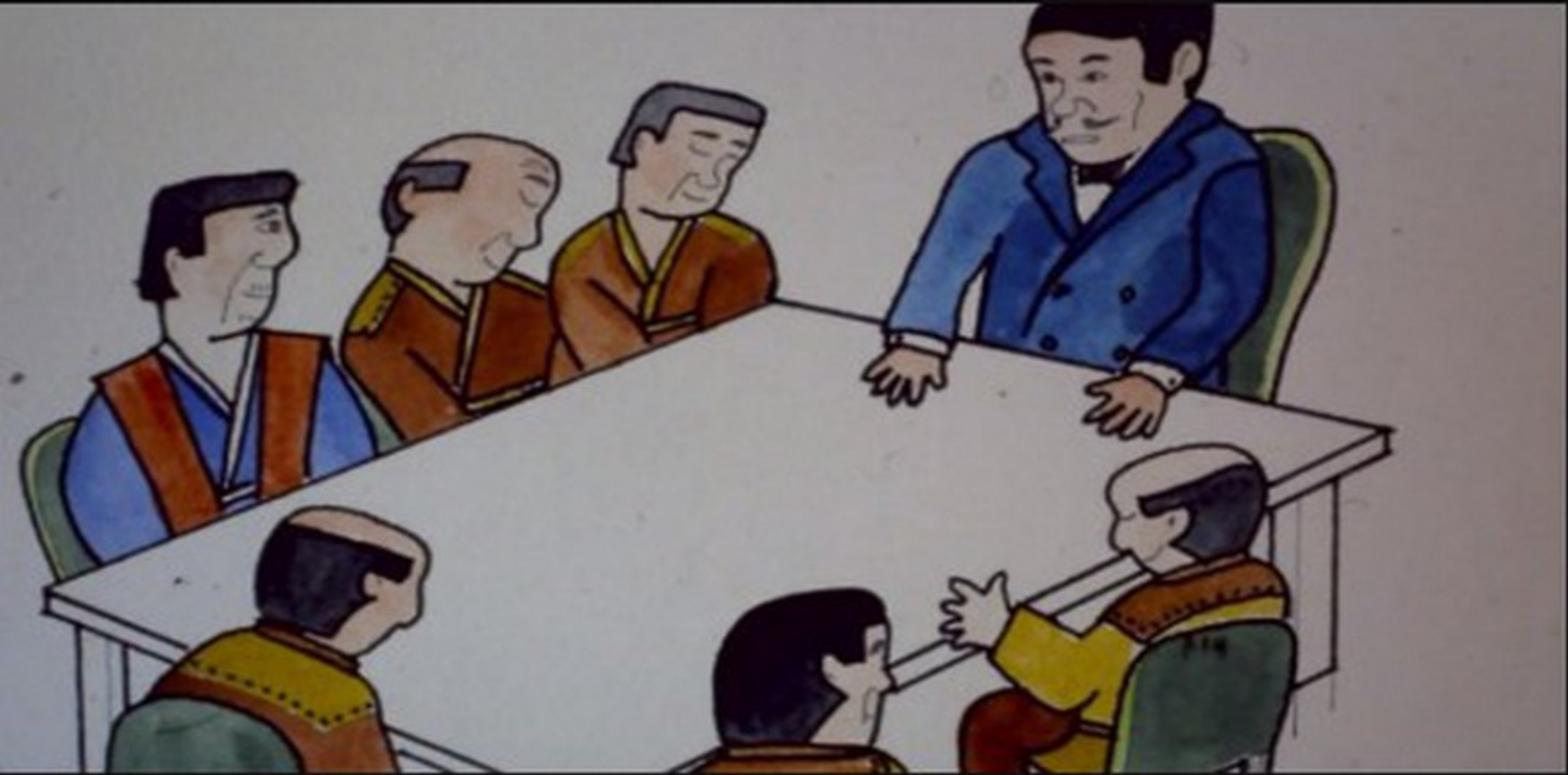
そのかいもなく、むなしいことに終わりました。



東京滞在の費用を節約するため、秀孝のはからいで一けんの借家に移り住むことになりました。

8人は、土木局の仕事をしたり海軍省兵器局の工事人夫となったりして政府へうったえ続けていました。しかし、どうしても政府の許可はおりません。





ある日のこと。秀孝は亀太郎たちを自分の宿舎に呼び、「田辺県知事も大変心配され尽力されたが、どうしても政府の許可がでない。あなた方の心情を思うと気の毒でならない。これ以上東京にいても無駄だと思うので早く帰るようにされたい。ここに知事から百円そして私からも心ばかりだがこのお金を旅費にして帰ってほしい。私も知事の命令で早く帰り、負債の整理と工事が続けられるようおおいに努力する考えである。」と、亀太郎たちを説得しました。



秀孝の言葉を信じ、冷たい氷雨のふる12月の末、8人は東京を後にしました。伊勢から京都をへて大阪から船で宮崎に帰りました。そしてひたすら秀孝からの連絡を待っていました。



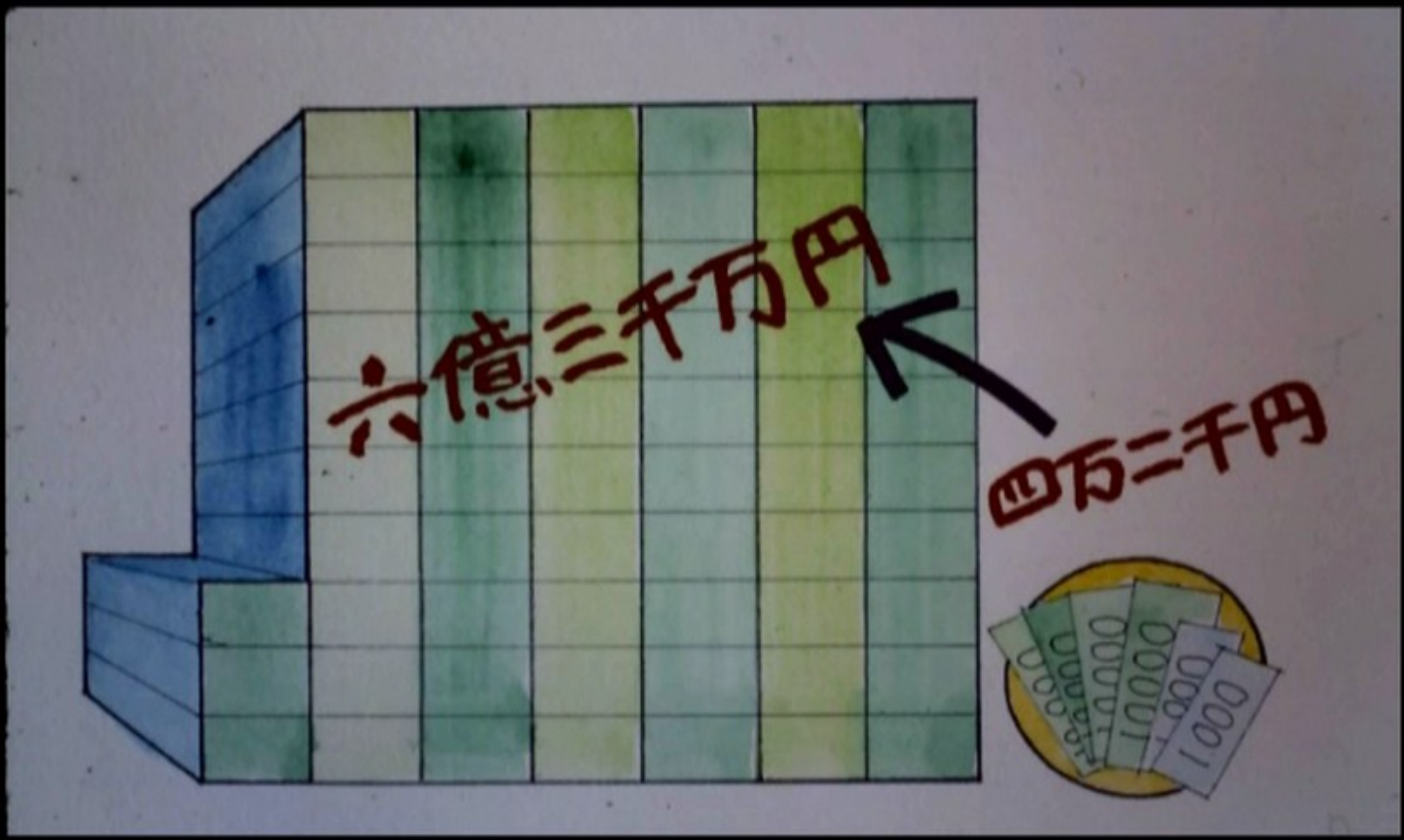
明治17年1月、秀孝の尽力によってようやく政府からの貸し金1万円を借りることに成功、さらに県の補助金もでることになりました。

亀太郎たちは勇気百倍、大工事は急ピッチで進められました。





明治22年、8年間という長い年月をかけ、念願の大工事はとうとう完成しました。  
 水路の全長10、190m 幅3m 深さ2m ずい道20箇所 井ぜきの長さ140m、井  
 ぜきの幅11m。



工事費は、実に4万2千34円、今のお金にすると6億3千万円という多くのお金がかかりました。



思えば明治13年この用水路開通のために先祖伝来の財産を手放し、何度も死を考えたことがありました。





亀太郎たちのどの家庭も、どん底の貧乏暮らしとなっていたのです。

ある人は漁夫となり、また日やとい人夫となって、あえぎあえぎ暮らしているありさまです。





その春から8年間…。井上亀太郎たち8名は、命がけの請願に自分の小指を切って決議を示した八百治の心意気、よく困難に対して仲間を導いた思慮深い亀太郎、それにもまして、鉄より硬い団結の力で、見事この大事業を完成させたのであります。





明治25年、亀太郎たちは、...





らんじゅほうしょう

「教育衛生慈善防疫の事業、学校病院の建設、道路河渠堤防橋梁の修築、田野の墾闢(こんぺき、開墾)、森林の栽培、水産の繁殖、農商工業の発達に関し公衆の利益を興し成績著明なる者又は共同の事務に勤勉し労効顯著なる者」に授与されます。

藍綬褒章の栄によくしました。



亀太郎たちの功績を永遠に記念するために水利竣工の碑が犬熊の「御才藪(ごさいぞの)の水門」の上に建てられました。

用水路の完成を祝って、盛大な風水式  
が行われました

この日は33番の神楽を奉納します。にぎ  
やかな踊りのはやし、「わーっ」と言うかん  
声

いく百いく千といわれる人達が集まり、  
南用水路の完成を喜びあいました・・・





流れ行く水の音をききながら亀太郎達8名は、ひとすじ、ふたすじの涙が、  
とめどなくおちるのでした。

「亀太郎どん みんな やっぱ夢じゃなかったの一。」



教育委員会社会教育課が作成・保管していますDVD「南用水路をつくった人たち」をもとに作成しました。